

2026.07.26.

「信じられない者と結ばれる永遠の契約」

旧約 創世記 17章 1～22節

新約 ローマの信徒への手紙 2章 28～29節

1. はじめに

7月最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。創世記 12章から始まるアブラハムの話から御言葉を受けています。今日与えられている御言葉は 17章です。75歳で神様の召命を受けて、神様の約束の言葉だけを信じて旅を始めたアブラムでした。その時、妻のサライは 65歳でした。若い時にこのアブラハムの話を読んだ時は、「そんな年寄りになって旅を始めるなんて、考えられない。」と思いましたけれど、私も 70歳になり自分が召命を受けたアブラムに近い年齢になりますと、あまり違和感を感じなくなりました。75歳で新しく旅立つ。なんて素敵なことだ、などと思います。

2. あれから 24年

今朝与えられている御言葉は、アブラムが 99歳、妻のサライが 89歳の時の出来事です。つまり、アブラムが神様の召命を受けて旅立った時から 24年後ということになります。12章で 75歳のアブラムに与えられた召命は、①生まれ故郷、父の家を離れて私の示す地に行きなさい。②あなたを大いなる国民にする。③あなたを祝福の源と、地上の氏族は全てあなたによって祝福に入る。というものでした（創世記 12:1~4）。この神様の言葉を信じて旅だったアブラムでした。しかし、いつまで経ってもアブラムには子どもが与えられません。自分たちに子どもが与えられなければ、「大いなる国民」になどなりようがありません。アブラムもサライも「もう自分たちには子どもは与えられないだろう」と思うようになっていきました。ところが、神様は 15章でアブラムに幻の中で現れ「**恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの楯である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。**」（創世記 15:1）告げられました。しかし、アブラムはこの神様の言葉を信じられません。アブラムはもう子どもは与えられないと思い、僕が跡を継ぐことにしていました。ところが、神様は「そうではない」と告げ、アブラムを外に連れ出し満天の星を見上げさせます。そして「**あなたの子孫はこのようになる**」と告げられたのです。そして「**アブラムは主を信じました。主はそれを彼の義として認められました。**」（創世記 15:6）これが「信仰によって義とされた」と使徒パウロが告げた福音が示されたところです。ところが、これで終わらない。アブラムの不信仰は乗り越えたかということ、そうではありませんでした。やっぱり妻のサライはままでは自分たちに子

どもが与えられるはずがないと考えていました。そしてアブラム 85 歳、サライ 75 歳の時に一計を案じました。サライは自分の女奴隷である若いハガルとアブラムの間に子どもをもうけてもらおうという計画です。これは神様が自分たちに子どもを与えてくださるということを信じられなかったから立てられた計画でしょう。アブラムはこれを受け入れ、ハガルとアブラムの間に男の子が与えられました。これがイシマエルです。しかし、このイシマエルは神様の救いのご計画の中で与えられた子ではありませんでした。人間の知恵によって与えられたこです。このイシマエルが現在のアラブ民族の父祖と考えられています。それが 16 章に記されていたことです。こようにアブラムは 75 歳で召し出されて、神様の約束をずっと信じ切って歩んでいたわけではありません。私共はアブラムから始まる神の民の歴史を知っています。ですから、神様がアブラムを召し出し、アブラムがこれに従ったことがどんなに大きな、決定的な出来事であるかを知っています。しかし、アブラムはそれを知りません。そして、その信仰は時に揺れに揺れます。しかし、それでもアブラムを選ばれた神様の御心は変わりませんでした。ここに私共の救いの確かさの根拠があります。アブラムの信仰は揺れます。しかし、神様の御心は揺らぎません。私共の信仰の揺れることがあるでしょう。しかし、神様の救いの御心は揺らぎません。ここに神様の真実があり、私共の揺るがぬ救いの確かさがあります。

3. 密かな笑い

そして、アブラム 99 歳、サライが 89 歳の時に主がアブラムに現れました。これが今朝与えられている御言葉の場面です。神様はアブラムに告げます。1 節「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。 17:2 わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」更に 4 節「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。」アブラムが召し出されたのが 75 歳の時でしたから、あれから 24 年経っています。その間、アブラムとサライの間には子どもはいません。すでにアブラム 99 歳、サライが 89 歳です。神様がアブラムに「あなたをますます増やす」とか「あなたは多くの国民の父となる。」と言われても、またサライに対して 16 節「わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王となる者たちが彼女から出る。」と言われても、アブラムもサライもととてもとても信じることは出来ませんでした。何しろ、99 歳と 89 歳です。「信じられない」というのが普通でしょう。それが最も明瞭に現れているのが、17 節「アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。『百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。』」というところです。この「密かな笑い」とは、神様を侮る者の笑いです。神様の言葉を全く信じない者の笑いです。「そんな馬鹿な」といったニュアンスでしょう。

ただ、意外なことにこの箇所はあまり知られていません。それは次の18章に記されている話、神様の使いがアブラハムのところに来て『わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう』。サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。18:12 サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。18:13 主はアブラハムに言われた。『なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。18:14 主に不可能なことがあるのか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。』18:15 サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。『わたしは笑いませんでした。』主は言われた。『いや、あなたは確かに笑った。』こちらの場面があまりに有名だからです。どうして有名かといいますと、最後の主の使いが告げる「いや、あなたは確かに笑った。」が恐ろしいからということもありますけれど、14節の主の使いが言った「主に不可能なことがあるのか」という言葉が、マリアに天使ガブリエルが現れて御心を告げる受胎告知の場面で、天使ガブリエルがマリアに言った言葉「1:37 神にできないことは何一つない。」(ルカ 1:37) と同じだからです。その結果、神様の言葉を信じなかったのは妻のサラの方であるという誤解が生じました。

しかし、今見ましたように、アブラハムもサラも二人とも「密かにな笑った」のです。自分たちに子どもが来年与えられるという神様の言葉を二人とも信じられなかった。なぜか？神様が全能の方であることを信じられなかったからです。神様は1節で「わたしは全能の神である。」と告げられました。しかし、それを信じられなかったのです。それは今も変わりません。「イエス様の復活」また「時が来れば与えられる私共自身の復活」、これを現代人は簡単に信じられはしないでしょう。それは「神の全能性を信じるのが出来ない」からです。神様さえも自分の小さな頭の中に入れることが出来ると思っているからです。その意味では、人間は誰もが信じられない者であり、不信仰な者なのです。それが罪人であるということです。しかし、天地を造られた全能の神様は、決して私共の小さな頭の中に収まるようなお方ではありません。ここでアブラハムとサラは「信じられない者」「不信仰な者」として登場しています。では、神様の言葉を信じられない者を神様は見限り、見捨てるのでしょうか？聖書は「そうではない」と明確に告げています。

4. 割礼：永遠の契約

神様は10節で「あなたたち、およびあなたの後続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。」と告げられました。神様はアブラムとその子孫、更にはその奴隷たちも「割礼」を受けなければならないという契約を結ばれました。この「割礼」というものは、我が身に刻むものですから、目に見えない「気持ち」の問題ではなく、誰の目にも明らかな客観的なものです。「割礼を受けた者」であるということは、神様

と契約した者であるということであり、それは自分の気持ちによって左右されることではありません。揺れに揺れてしまうアブラムの神様への信頼・信仰を、神様はこの「割礼」によって固定する、否定できないようにする、確かなものにする。そういう意図があったに違いありません。神様はこの割礼を信仰深い、良き人に与えられたものではありませんでした。神様を信じることが出来ない、神様の全能の力を信じる事が出来ずに、密かに笑ってしまうようなアブラハムに与えました。これが福音です。思い違いをしてはいけません。信仰深い人、良い行いの人に割礼という永遠の契約を与えられたものではありません。

この割礼はアブラハムからイサク・ヤコブそして12人の息子達、更にイエス様の時代まで千何百年にわたって神の民に綿々と受け継がれていきました。しかし、この神様の憐れみに満ちた意図は正しく受け継がれることはありませんでした。この「割礼」は元々アブラハムから始まる神の民イスラエルの一員であることを示すものでしたが、何より大切な事は有るか無きかの信仰さえも全能の神様の御力によって支えられていることを確認するためのものでした。しかし、イスラエルの民はそれを「自らを誇る」ためのものにしてしまったわけです。「自分は割礼を受けた者だ。神の民だ。異邦人とは違う。自分たちは神様に選ばれた特別な者だ。自分たちこそ神様に救われる者だ。」そのように受け止めてしまったわけです。神様の「信じられない者をご自分の民とする憐れみの契約のしるし」を「自らを誇るもの」としてしまったわけです。それは御心にかなわないことでした。

5. 洗礼

時至って、神様はこの「信じることが出来ない者」さえもご自分の救いに与らせるために、イエス様を送ってくださいました。イエス様の十字架によって、一切の罪を赦していただく。このイエス・キリストによる救いに与る者が洗礼を受けます。洗礼は割礼と同じく1回しか受けることは出来ません。洗礼を受けた者は、神様の永遠の救いの契約によって必ず救われるのですから、二回も三回も受ける必要がないからです。そして大切な事は、この洗礼を受けたという事実は、本人の信じる気持ちによって左右されるものではないということです。今日は信じる気持ちが高まっているから洗礼を受けた者だけど、昨日は信じる気持ちが揺らいでいたから洗礼を受けた者ではなかった。そんなことはあり得ないでしょう。私共の信じている気持ちがどうであろうと、洗礼を受けた者は洗礼を受けた者なんです。イエス様と一つにさせていただいた者なのです。神の子としていただいたんです。だから救われるんです。

使徒パウロは先ほどお読みいたしましたローマの新への手紙2:28.29において「2:28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。2:29 内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです。」と告げました。今まで神様なんて関係

ないと生きていた者でも、偶像礼拝をしていた者でも、少しも優しくない者でも、何も出来ない者でも救われるのか？と問われたならば、私は「救われます」とはっきり答えます。神様はどんな人でも救ってくださいます。神様には出来ないことは何一つありませんが、その全能の力を私共に向けられ、どんな者でもお救いになられるからです。私共の神様は、信じることの出来ないアブラハムとサラに永遠の契約のしるしとして割礼を与えられた神様だからです。99歳のアブラハムと89歳のサラに子を与えると告げ、実際次の年、アブラハム100歳、サラが90歳の時にイサクを与えなれました。それが私共の神様です。

6. 名前を変えられる

さて、この時神様はアブラムに対して5節「あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。」と告げ、15節では「あなたの妻サライは、名前をサライではなく、サラと呼びなさい。」と告げられました。ここからアブラムはアブラハムとなり、サライはサラと名前が改められました。アブラムとアブラハム、何が違うのか良く分かりません。サライとサラもそうです。ここでアブラムとアブラハム、或いはサライとサラの意味の違いを詮索してもあまり意味がないでしょう。大切な事は、神様が永遠の契約を結んだ者に対して新しい名前を与えられたということです。名は体を表すではありませんが、名前を変えられたということは新しい人間として生きる者にされたということです。私共はローマ・カトリック教会のように洗礼名といったものは付けません。今、その理由について述べる時間はありませんけれど、たとえ洗礼名がなかったとしても、洗礼を受けた者はアブラムがアブラハムに、サライがサラに変えられたように、神様の御前に新しくされた者として生きる者になった。それは確かなことです。

私は20歳で洗礼を受けましたけれど、あの日を境に私は「キリスト者小堀康彦」「神の子小堀康彦」として新しく生きる者になりました。もちろん、その日を境にまるで別人のように話すことも性格も変わったということではありません。この変化は、人によって様々です。パウロのように傍から見てみるみる変わっていくという人もいるでしょう。しかし、どこが変わったのか分からないという場合の人の方がずっと多いでしょう。しかし、5年、10年、20年、30年と経ちますと確かに変わっている。洗礼を受ける前の自分、30年前、40年前の自分と比べてみれば、現在の自分は全く変わっているでしょう。何を喜びとし、何に希望を持ち、何を大切にし、何を誇りとするのか。それは大きく変わったのではないのでしょうか？それはみんな神様によって与えられたものです。それまでは「目に見える何か」を求め、それを得れば自慢し、それを失えば落胆する。そのような日々だったのではないのでしょうか。しかし、今は違います。もともと、自分から「キリスト者になって、私はこんなに変わった」と公言する人は、？？？という場合もあるでしょう。その人が「こんなに自分は変わったと言って誇る」ならば、それは「自分を誇っている」のであって少

しも変わっていないからです。変わったと本人が思っているだけ、自意識過剰ということだってあるでしょう。私共はただ聖霊なる神様によって変えられていきます。ゆっくりであっても、確実に変えられていきます。

7. 全き者となる

この神様の救いの契約によって、神様は私共をどのような者へと導こうとされているのでしょうか。1節「**アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。」**」とあります。神様がアブラハムとサラに求めたことは、①神様に従って歩むということ、②全き者となるということでした。これが神様が私共に求めておられる信仰の歩みです。神様に従って生きる、そして全き者となるように生きる。確かにこれが大切だとは誰もが思うでしょう。しかし、同時にこれをどうすれば完全に出来るのかと考えると、自分には無理じゃないかと思う人の方が多いでしょう。私もそうです。しかし、ここで神様は「**私は全能の神である**」と告げてから、「**あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。**」と言われていることに注目しなければいけません。これは神様が私が全能の力をもってあなたの歩みを導くから、全き者とするから、何も案ずることはない。私があなたを「私に従い、全き者にする」と宣言され、私共を招いてくださっているということです。私共は洗礼を受け、イエス様によって救われたのですから、全能なる神様によって変えられ続けていきます。自分はちゃんと神様に従っていけるだろうか、全き者になれるだろうか、そんなことは少しも心配することはありません。イエス様が再び来られる時、私共はイエス様に似た者に変えられます。その時私共は例外なく、全き者としていただきます。それが私共に約束されている救いの完成です。私共はその日を待ち望みつつ、その日を目指して、この地上で与えられた一日一日を歩んで行きます。それが神様と永遠の契約を結んだ私共に与えられている新しい命の有り様なのです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

今朝、アブラハムに割礼が与えられた出来事を通して御言葉が与えられました。私共は自分の信仰が強いとか弱いとか、自分の心の中を覗き込んで自信を持ったり、失望したりしてしまいます。しかし、あなた様は愛する独り子イエス様を与えてくださり、その尊い血しおをもって私共の一切の罪を赦し、神の子としてくださいました。この救いの御業は何ものによっても碎かれることはありません。そのことをしっかり心に刻んで、安心してあなた様に従い、御国を求めてこの一週も健やかに歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン